

弥富市小中学校適正規模検討委員会 会議録

日 時 平成26年7月4日（金） 午前10時00分

【出席者】 吉田 正委員、服部 博委員、東嶋とも子委員、加賀健二委員、佐藤恒男委員、
瀬戸正和委員、飯田新一委員、石田一英委員、位田 学委員

【欠席者】 服部正美委員

【オブザーバー】 伊藤昭三教育委員長

【事務局】 下里博昭教育長、服部忠昭教育部長、五十嵐司朗教育部次長、立松則明課長、森 敦睦
主幹、水谷みどり主幹

○ 議 事

学校教育課長 それでは、定刻より前でございますが、おそろいですので始めさせていただきたいと思ひます。

ただいまより第5回弥富市小中学校適正規模検討委員会を始めさせていただきます。

今年度、かわられた委員さんには、委嘱状を机の上にお配りさせていただいております。本来ですと、市長からお一人お一人に交付させていただくのが本意ではございますが、時間の都合上、お配りさせていただきました。何とぞ御了承賜りたいと存じます。

この適正規模検討委員会は、会議録を公開しておりますので、個人名は出しませんが、原則公開とさせていただいておりますので、よろしくお願ひいたします。また、会議録作成のために、御発言の際にはマイクを御使用していただきますようよろしくお願ひいたします。

それでは、次第に沿いまして進めさせていただきます。

最初に、吉田委員長さんから御挨拶をお願いいたします。

委員長 おはようございます。

昨年度より、この会議の委員長を務めさせていただいております吉田と申します。現在、勤め先は名古屋学院大学というところで、瀬戸に通っております。昨年は4回の議事をしまして、第1次の取りまとめをさせていただきました。また、本年度も引き続きよろしくお願ひいたします。

学校教育課長 ありがとうございます。

次に、本日は、本年度最初の会議でございますので、かわられた委員さんもお見えになります。委員紹介をさせていただきますので、お手元の名簿の順に紹介させていただきます。

学識経験者で選出され、委員長をお願いしています吉田正様です。

委員長 吉田と申します。

学校教育課長 公募委員の服部博様。

服部(博)委員 お願いします。

学校教育課長 同じく公募委員の東嶋とも子様。

東嶋委員 お願いします。

学校教育課長 以上の皆様は、昨年度から引き続き委員の方でございます。
次に御紹介させていただく皆様は、充て職の方で、本年度から委員になられた方
でございます。

区長会代表で、区長会長の加賀健二様。

加賀委員 どうも初めまして、加賀でございます。よろしく申し上げます。

学校教育課長 同じく区長会代表で、区長会副会長の佐藤恒男様。

佐藤委員 佐藤と申します。よろしくお願いいたします。

学校教育課長 保護者代表で、十四山中学校PTA会長の瀬戸正和様。

瀬戸委員 瀬戸です。よろしくお願いいたします。

学校教育課長 同じく保護者代表で、栄南小学校PTA副会長、飯田新一様。

飯田委員 よろしく申し上げます。

学校教育課長 学校代表で、校長会会長の石田一英様。

石 田 弥富中学校の石田と申します。よろしく申し上げます。

学校教育課長 同じく学校代表で、校長会副会長の位田学様。

位田委員 弥生小学校の位田と申します。よろしくお願いいたします。

学校教育課長 本日、副委員長で服部正美様が欠席しておりますが、以上10人の方が今回の委員の方
でございます。

続きまして、オブザーバーとして、教育委員長の伊藤昭三様。

教育委員長 伊藤でございます。どうぞよろしく申し上げます。

学校教育課長 事務局として、下里教育長。

教 育 長 よろしく申し上げます。

学校教育課長 服部教育部長。

教育部長 よろしく申し上げます。

学校教育課長 五十嵐教育部次長。

教育部次長 よろしく申し上げます。

学校教育課長 学校教育課、森主幹。

学校教育課主幹 よろしくお願いいたします。

学校教育課長 同じく、水谷主幹。

学校教育課主幹 よろしくお願いいたします。

学校教育課長 最後、私は学校教育課長の立松でございます。どうぞよろしくお願いいたします。
それでは、議事に移らせていただきます。

進捗につきましては、委員長のお取り回しでよろしくお願いいたします。

委 員 長 それでは、この次第に沿って進めさせていただきたいと思っております。

事務局のほうから、議事の3に当たります趣旨説明のほうをお願いいたします。

教育部長 教育部長の服部でございます。

座って説明をさせていただきます。

それでは、小中学校適正規模委員会の趣旨について御説明をさせていただきます。

弥富市におきましては、「一人一人が輝き、よく学び心豊かでたくましい弥富の子、明日の弥富、平和な国際社会を担う人づくり」ということを基本方針としまして、子供たちの持つ多様な能力とすぐれた個性を伸ばし、確かな学力を身につけ、思いやりの社会性をといった豊かな人間性を育ててまいりました。

しかしながら、全国的な少子化によりまして、児童・生徒の減少が起こっております。本市におきましても、現在1学年1クラスの単学級の学校が小学校8校のうち4校ございます。また、中学校におきましては、3校のうち1校が1学年2クラスという小規模校でございます。将来的には、各学年が単学級になる見込みでございます。栄南小学校につきましては、平成31年、もしくは32年には全児童数が100名を割る予測をしております。十四山中学校につきましても、平成38年には生徒数が100名を割ると予測しております。

現在、それぞれの教育環境に応じて、充実した学校教育ができるように努めてはおりますが、少子化の波は児童・生徒の集団活動という観点からも多くの影響を及ぼすことから、学校規模の適正化が課題となっております。この学校規模の適正化につきましては、地域的な特性の配慮や児童・生徒にとって望ましい教育環境の構築という観点から、保護者や地域の皆さんを初め、多くの意見を聞きながら検討していく必要が出てまいりました。

そこで、最後のページのほうにございますけれど、昨年から弥富市立小中学校適正規模検討委員会を立ち上げ、こちらの要綱により開催しております。昨年は、学校生活や学校運営などに関する諸問題を調査しまして、こういった学校の適正規模について検討するため、この委員会を昨年立ち上げさせていただきました。具体的には、学校の規模及び配置の適正化に関する基本的な考え方をさせていただくこととなります。

この委員会につきましては、先ほど言いました4項3条によりまして、学識経験者、地域代表、保護者代表、学校関係者、公募による市民の代表の皆様10名による委員で構成されております。委員の皆様は任期につきましては、第4条によりまして、原則としまして、市長に提言するまでとなっております。この提言期間につきましては、3年間でございますので、平成27年度末を期限としております。

なお、お手元の委員の名簿の充て職により、先ほど御紹介させていただいておりますが、区長代表及び保護者代表、学校代表の6名の皆さんの委嘱期間につきましては、その職務の任期中となっておりますので、何とぞ御了承のほうよろしくお願ひしたいと思います。

以上のことが、本委員会の趣旨でございます。以上でございます。

委員長 ありがとうございます。

先ほどの御説明のところは、皆様方にお配りしてあります資料のところ、人数がこれから10年後をめどに、小学校は6年後になりますか、子供たちの数が減ってくるというようなところで、資料の2のところをごらんになっていただければわかるかと思いま

す。

それでは引き続きまして、昨年4回の議事を行った経過説明という形で、第1次答申ではございませんけれども、とりあえず去年まではどういう話になったかということで御説明をいただきたいと思いますが、よろしいですか。

学校教育課長

経過報告をさせていただきます。

平成25年7月24日に第1回目の委員会を行い、市内の小・中学校の児童数の現状と今後の推移について、学校施設等の現状について、学校の標準適正規模について、今後の進め方について話し合われました。平成25年10月30日に第2回目の委員会を行い、市街化区域について、各学校区について、小規模校のメリット・デメリットについて話し合われました。平成25年12月18日に第3回目の委員会を行い、小規模校として栄南小学校、大規模校として弥富中学校、新設校として日の出小学校の視察を行いました。平成26年2月20日、第4回目の委員会を行い、平成25年度小・中学校適正規模に関する取りまとめについて協議しました。

取りまとめの内容につきましては、小学校については、メリット・デメリットいろいろありますが、通学距離を考えた場合、小規模校同士の統廃校は極めて困難と考える。学校区に関して見直しをする場合、現在、地域の行事や子ども会の活動など、小学校区と密接なつながりがあり、これを変えようとした場合、地域住民や保護者の理解を得るのが難しい。

中学校につきましては、同じようにメリット・デメリットいろいろありますが、市内には過大規模校はないが、規模が大きくなり過ぎると、一概には言えないが、正常に学校経営ができなく、教育困難になる傾向がある。現在、弥富中学校が大規模校に該当するが、これ以上過大になっていくことを防ぐ方策をとるのは必要と考える。その方策としては、中学校の通学区域を変更することによって、適正規模の確保に努める。そして、財政上の問題を考慮しなければ、中学校を新設することによって適切な対応を行う。今後、中学校の規模をどのようにするかということが大きな問題となってくるということでございました。

今後の検討としまして、今回、学校の適正規模に関しては、学習面、生活面、学校運営面・財政面、その他の4点から検討を行い、その結果、中学校を過小規模、または過大規模にすることは望ましくないという結論が出ました。そのことにより、中学校の通学区域を見直すことによって再編成をする方策が提案されました。そのためには、現在の学校名にとらわれない形で、中学校の新設も視野に入れ、生徒の教育環境に格差が生じないように、また学校と地域との関係を考慮して、保護者や地域住民の理解を得て、合意形成に努めることが重要であるということが話し合われた結果でございます。

簡単ではございますが、以上が1年間の経過報告でございます。

委員長

ありがとうございました。

昨年度の検討事項、幾つかございましたけれども、今お話しいただいたような形で、とりあえず第1次の結論ではございませんけれども、そういう話で、その次のステップに行きたいなと思っておるんですけれども、とりあえず先ほどの説明について、皆さん

方もその資料をお持ちなんですね。このことについて、御意見とか御質問をいただきたいと思います。新しい委員の皆様方もいらっしゃると思います。これはどうしてこうなっているんだというようなことがもしございましたら、御意見いただきたいと思いますけれども、いかがでしょうか。

委員 今の適正規模にするのに新しく中学校をつくることを視野に入れて云々という説明がございましたけれど、今の弥富市の財政状態は、既に市債、要するに借金を25年度末時点で約160億も繰り出しているわけです。ですから、新しくつくるという議論が、どうしてそんなことが出たのか、ちょっとよく理解がしがたいと思います。

それからもう1つ、小学校区を変更する場合、地域住民の理解を得がたいようなお話がございましたけれど、それは全体にそうになっているのか。実は、大昔の話でございすけど、私は今佐古木に在住しておるわけでございますけど、小学校のころ、すぐ川を渡った十四山西部小学校に通学していたんですね。当時、十四山村と市江村、全く行政が違うんですけど、佐古木の方は約半分ぐらいそこへ行っていたわけです。そういうことがなぜ今の時代できないのか。ましてや同じ市内でありますので、どうしてそうになっているのかがよく理解できませんけど、そのあたりの説明をお願いしたいと思います。

学校教育課長 まず、新しい学校の建築というところでございますが、これは先ほど財政上の問題を考慮しなければ、そういう部分も踏まえてということで、あくまでも建てるという前提でということじゃなくて、この委員会の中でいろんな意見を出していただく上で、そういうお話も出たということでございまして、やはりいろんな考え方も出していただかないと、1つの考え方だけで行ってしまうとなかなかあれですので、統合するに当たっては、そういうことも踏まえてやると統合も考えやすいとか、そういう部分で出たということでございますが。

教育部長 それと、本日の中日新聞でも出ておりましたけど、小中一貫校の建設が、従来までは、現在近隣では飛島がありますけど、特区申請じゃないとできませんでしたが、先ほど課長が言いましたように、財政上のことを考えなければ、例えば十四山中学校で小中一貫校ができれば、具体的な話をしますと、日の出とか桜とかにいてもあちらへ行くことは可能ですけど、線引きを強制的にして、例えば十四山へ来てくださいと言っても恐らく理解は得られないだろうということは、前回の意見のときにございましたので、財政上のことを考えなければ、小中一貫校を新たにつくって行うことも可能であるということで、その意見として、先ほど課長が説明しました件でございます。

教育部長 それと、学区外、区域外、要は住所地と違うところの小学校へ行くことを区域外とか学区外という呼び方をしておりますけれど、市江村の状況はちょっと私も承知はしておりませんが、現在のところだと、市内の小・中学校であっても、基本的には住所地のところの小・中学校へ行くのが大原則でございます。ただ、いじめとかいろんな状況があって、違う学校へ行ってみえる方もあります。ただ、該当者の半分ほどが違う学校へ行くということは、通常はあり得ないです、行政区の考え方としましては。

委員 事実、行っていたわけですけど。

教育部長 その市江村のときはちょっとわかりませんが、例えば栄南小学校の子が半分ほ

ど、飛島に近いから飛島へ行くということは、通常の行政の今の考え方としてはあり得ない形でございます。イレギュラーな形で、住所地の転居とか、そういう形ではございますけど、地域の方が半分ほどがこちらに行きたいから、全部隣の学校へ行くということは、通常の教育行政の中では考えにくいケースでございます。

ただ、学校区の変更につきましては、基本的には行政が引くんですけど、ただ地域の理解が得られない。行政が学校区を変更しても、結果として混乱が生まれますし、基本的には学校は地域と一緒にいろんな行事をやりますので、余り好きなところというところとちょっと変ですけど、ある一定の行政区の引き方は必要かと思えます。

それと、前回のときも一部お話が出ましたけど、学校選択制というのものもあるんですけど、現在弥富市で問題になっておるのは、十四山地区の小規模校の問題をどうするかということが一番大きな課題でございます。十四山の東部小学校、西部小学校、十四山中学校の規模が、先ほど申しましたように、1学年1クラスという、クラスがえができないという状況でございますので、この地区の人数をふやす方策を考えないといけないうことで、先ほど申しました小中一貫校のお話も、財政上の問題を考慮しなければそういう選択もあるということで、25年度の取りまとめということでさせていただきました。

委員 名前に、私はこだわっているんだと思うんですよ、この十四山とついていること、全部弥富市にあるわけですから、弥富東中学とか、今現実に弥富北中とか、弥富中学とかあるわけですから、小学校においても弥生だとか、白鳥とか、栄南とか、大藤とか、そうになっていますから、十四山西部だとか、十四山東部、あるいは十四山中学、この十四山という名前にどうもこだわっているんじゃないかなと、こんなふうに私は考えるわけです。こういう問題は、もう既に合併して10年近くたつわけですから、民間だったら待ったなしなんですよ、こういう話は。

やはりその辺のところを行政側としてもっとスピーディーに考えなきゃいけないし、それを住民の方に納得していただけるような努力をしていかないと、ちょっとそんな簡単に地域住民のお話だけを聞いていたんではうまくいかないんじゃないかなと思います。まず、学校名から、そんな難しいことじゃないんだと思いますけど、いかがでしょうか。

委員長 昨年度、話し合いで、なぜ財政面のことを言わないかということなんですけれども、財政面とかそういう話を全て抜きにして、教育的視点から考えたらどうかというところが去年の主な議論の出発点だったんですね。なぜ、そんなことを早くできないか、私も3年もこの議長をやれと言われるのも本当に苦しいんですけども、おっしゃるとおりだと思いますが、このことを拙速に進めてしまおうまくいかないというお考えがあるようですので、企業の論理とはちょっと別の形で進めなければいけない。特に、教育の問題というのは非常に複雑だと思うので、3年の期間をもって当てるということだと私は思っております。

委員 最後の2ページを今見ておりますけれど、取りまとめ（25年度）というところの下から4行目です。

財政上の問題を考慮しなければ、中学校を新設することによって云々とありますが、

これは昨年度の最後の委員会においての提案でございます。しかし、こういう考えもあるだろうということで、この2ページを取りまとめられた方は苦勞されたと思うんですが、この財政上の問題というのは、もっとも財政上資金が必要だろうということです。この意味は、行間を読みますと、中学校を新設するということは、4つ目の中学校をつくるという意味で言われたんだと思います。そういう意味に捉えております。

右のページの上半分、4行ぐらい、3行ぐらいですかね、小学校については、中学校も含めまして、結論づけを行いました。もう結論づけられているわけですね。すなわち、中学校を過小規模、または過大規模にすることは望ましくないという結論づけを行いました。これは、昨年度の4回の結論づけのものでございます。

それから、下から3行目、そのためには、現在の中学校名にとらわれない形での中学校の新設も視野に入れてと。新設も視野に入れてとありますけど、これの行間を読む形で膨らませて、私の理解を含めて言いますと、現在ある既設の3つの中学校の名前にとらわれない。それを取り払うようなことまで言ってもよいですが、とらわれない形での既存の中学校をベースにした、今で言うリノベーションですね、あるいはリニューアルした中学校。見かけは全く新しい中学校になってしまっていると思うよりも、既設の中学校ということ限定された上での言葉だと理解しております。また、何か異なった理解がございましたら、つけ加えていただきたいと思っております。以上です。

委員長 はい、わかりました。

昨年度は、小学校区に関しては、子供たちの通学手段が徒歩であることから、余り大きな変革はできないだろうと。過小規模になっても何とか維持していかなければいけないんじゃないかというのがありました。中学校については、逆に過大規模のほうが問題じゃないかと。過小規模よりも過大規模のほうが大きな問題を抱えていくのではないかなという視点で動いておりましたので、3つの中学校をいかに存続していくかという視点だったと思います。そのときに、校名といいますか、これまでの概念を変えるという意味で、校名も変えたらどうだというような話が出てきましたけれども、それが最後のところだと思います。

ですから、財政のことについては、私たちは全くわかりませんので、財政のことを考えずにこんな議論をよくすると言われるとこの会議が成り立ちませんので、財政面のことについてもまたいろいろお考えいただきながら、これからやっていかなければいけないかなと思うんですけれども、その他、何か御質問ございませんか。

委員 十四山のPTAの方も御指摘されているわけですが、実際、校名を変えたり何かすることは相当抵抗感があるんでしょうか。

委員 私も子供のころから十四山で育っておりまして、今も地域の少年野球だとか、地域の中学校の部活動だとか全般を見て毎日過ごしているんですけど、やっぱり地域の問題なので、地域の名前がなくなるということに対しては非常に抵抗があります。

委員長 ですから、十四山という名前をなくすかどうかは別にして、全てシャッフルして、弥富中学も弥富中部中学とか、そういう話だったんですけどね。だから、既存の概念を取り払ったらどうだという話をしている、それで解決していくかどうかというのは、1つ

は学区の問題がございまして、そこに去年はぶつかっちゃったんですよ。学区を変えない限り、例えば現在の十四山中学校に人を集めるということはもう無理だということでございますので、何とか過小規模にならないように、そこに何らかのインセンティブを与えて、みんなが行きたい学校にするかという話も出てきましたけど、そこで終わっております。

委員 学区を変えるのは非常に難しいということですか。

教育部長 学区を変えることは簡単ということではございません。当然、地域の方の理解を得られないとできませんから、先ほど十四山の問題が出ていましたけど、合併するときに、事務局は、例えば東平島の一部を今現在の十四山西部小学校のほうへ区割りしたほうがいいんじゃないかという提案をしたときに、地元のほうから平島を割るというのはとんでもないと反対されましたし、十四山西部小のほうも弥富のほうは来てほしくないということもいろいろありまして、結果的には小学校区については、現状の状態ですべてスタートしております。ただ、距離を見てもらうと、十四山西部小学校は平島の地区からも近いですから、理解が得られれば、そういうことは可能でございます。

それと、方法として、選択ということもございまして、先ほど委員長が言われましたけど、例えば弥富中学校も日の出小学校もまだ新しい建物でございます。当然、十四山西部小学校、十四山中学校はかなり老朽化しておりますので、わざわざという言い方はちょっと失礼かも知れませんが、建物の古い学校になぜ行かなければならないかということが出たときに、先ほど話題に出ておりますけど、小中一貫校とか、皆さんが行きたがるというか、そういう学校にしないと、選択制なり線引きをしてもなかなか理解を得られないんじゃないかという議論がございました。

それと、十四山西部、十四山東部はちょっと私の記憶ではなかったんですけど、十四山中学校という、その名前については、例えば弥富東部中学校とか、そういう名称にして抵抗感を減らすという選択はあるんじゃないかという御意見はございました。ただ、合併のときにお聞きしたんですけど、合併してしまうと十四山という名前が消えてしまいますので、地名もございませんので、例えば大字弥富とか、大字十四山があるわけではございませんので、そういうこともあって、十四山東部小学校、十四山西部小学校については、そういう形で残したいという意見が強かったというふうに私は聞いております。以上でございます。

委員 市江村も2つに分かれたんですね、当時。佐古木、又八、楽平、東中地、西中地、前ヶ平、それから鎌倉もだったかな。要するに、その分が弥富市についたわけですけど、当時の記憶は、佐古木が一番当時から人が多くて、半分ぐらい十四山西部小学校へ行っていたんですよ、本当に目の前にあったわけですから。

よくよく歴史的に考えてみますと、明治の半ばまではどうも佐古木と又八と楽平の半分ぐらいは旧十四山村という経緯があったようで、そういう名残があったから十四山西部小学校、今の西部小学校じゃなくて、今保育所になっているところが十四山西部小学校ですから、本当に距離が近かった。

逆に、市江小学校は今の愛西市の佐屋高校かな、あそこまでだから、とても遠いから

ということで、当時は十四山の方はみんないい方で受け入れていただいたと思うんですけど、非常に我々も近くでありがたかったと。中には、中学校も十四山へ行かれた人がいて、それから旧市江村で弥富の中学校へ行っていた人もいたし、本当に当時はおおらかだったというか、自由だったんですね、そういう意味では。なぜこんなに難しくなったかというのがよく今のことはわかりませんが、いつからこんなに厳しくなったのか、その辺はよく理解しがたいところがあると思います。

委員長 私も小さいころを思い出しました。今、保育所があるところが小学校でしたね。どうしてこうなったかというの私はよくわからないんですけども、そのあたりがおおらかなまま来ていれば、合併したときもこうならなかったのかもしれないけれども、やはり弥富中学が余りにもきれい過ぎるといふところもありまして、みんなそこに行きたいというんですかね。

それと、昨年出たのは、子供たちの人数が少ないとクラブ活動の数が少ない。それで、例えば、十四山中学にはサッカーがないと。だから転校するという子たちも出ているという話で、やはり人数の少ないことのほうのデメリットというのは結構ありまして、だからそのあたりをもう少し、結構クラブ活動というのは、通常の授業と同じぐらいのウェイトを占めて、子供たちが希望するもんですから、なるべく部活動の数を多くしてやるということが大事かなということは思っているんですけども、私も体育の人間でございますので、そう思っております。

それと、十四山という名前に、私はこだわっていないんですけども、やはり地域の方々是非常にこだわりがあるのではないかと、先ほど申し上げましたように。それと、その地区でいろいろ活動されていて、それがばらばらになるとかということに関して、去年もございましたけれども、お祭りはうちのこの単位でやっているんだとかということではなかなか、今の自治会の組織もしっかりされていますので、その線引きがなかなか難しいんじゃないかなとは思っておりますが、いかがですか、その点、区長さんとして。

委員 私は、十四山小学校は5年生までだったんですけど、今この年になって、きょうも福寿会なんかは長島温泉で歓迎会をやって、後から行くんですけど、たくさん十四山の友達がおりまして、そういう意味ではよかったと思っております。僕らの時代は、旧市江村から弥富へ行くときも、当時親は心配したのかわかりませんが、弥富市がスクールバスを設けてくれまして、楽平とか、又八とか、あの辺らの子を拾って、佐古木を拾って、弥富の今の忠霊塔のところも運んで、今の弥生小学校が弥富小学校だったんですけど、あそこ1校しかなかったんです。

ですから、僕らは、当時随分学校をかわりましたね、今の弥生へ行きましたし。それで、今の桜小学校が弥富中学校だったもので、あそこで2年までいまして、それから平島のところに弥富中学校、第1期弥富中学校の卒業生でございますので、ですからもうどんどんかわって、そのたびに、ちょうど弥富中学校へ行ったときに鍋田の方が一緒になって、ですから鍋田にもたくさん友達がいると。この年になって、弥富市全体に友人もいますので、そういう意味ではメリットがあったかなと思います。

ですから、十四山の方たちも、また弥富の平島の方たちも、そういう広い将来のことまで、特に親御さんが固持しているんじゃないかなと思います。子供たちは余気にしていないんじゃないかなと思うんですけど、その辺のところを、もし賛否をとるとかそういうことをしたら、親御さんのエゴじゃなくて、子供たちの本当のところを聞いてみたらどうかというふうに思いますけど、いかがなものでしょうか。

委員 済みません、初めてこういう会議に出席させてもらってましたのでよくわからないんですけども、確かにずうっと歴史をつくってきたまちまちなもんですから、例えば海部郡という言葉がなくなったと同じように、十四山という名称がなくなってくるということは非常に寂しいというのはよく理解できるんですよ。ただ、今、西区の区長をさせていただいているんですけども、昔は各町内を1部落、2部落、3部落とかというふうに呼んでおったんですけども、やっぱり高齢化と世帯数も減ってきたということがありまして、昨年度、昔1部落という部落、今で言う1町内と2町内ですけども、そういうところの役をやる人が高齢化のためにどんどん飛んでいってしまうということで、非常に役回りが早くなってきたということがありまして、それで1町内と2町内を合併させたんですよ。1、2で1町内。それに伴ってきて、今まで11町内というところが4町内に呼び名が変わるとかということで、そのときも若干地元の方から、何で町内名が変わらないかんのやとかいうことは起こり得るんですよ。

とはいっても、やっぱり結果から見ると、合併に伴って、役回りが年のあく頻度が延びていくということもあったりとかというのはあるもんですから。名前はやっぱり大切だし、歴史とともに伝わってきていますので、随分重要だとは思いますが、まず焦点を子供たちの教育、子供たちをきちっと6年間と3年間育んでもらうという観点からいくと、やっぱり焦点というのを子供たちの教育とか、生活とか、部活動、そういうところに絞って考えていったほうがいいのではないかなあということで、先ほどもお話しされていましたが、本当に全体で地名というのは確かに重要だし、伝承されていかなければいけないものだと思うんですけども、先ほどお話があったように、シヤッフルみたいな形にして、弥富北、南、中とか、東とか、東西南北ですか、そんなような感じの名称にこれからやっぱり変えていく方向でいったほうがいいのではないかなあというふうに思います。確かに、我々の先輩とか親御さんたちが、やっぱり十四山という言葉を残したい、使いたいという思いもあると思いますので、その辺の気持ちはよくわかりますけれども、今のところそんなふうです。

委員長 経過報告の御説明の中でいろいろ質問も出てきて、次の意見交換のところまでもう入ってしまっているんですけども、この経過報告の御説明の中で、もうちょっとこういうところが聞きたいとか、これはどうなっているんだという御質問・御意見がございましたら、お願いいたします。

委員 栄南小学校はすごい児童が少なく、十四山と似ているところがあるんですけど、先ほどから、個人的な意見でいいですよ。僕は十四山という名前は残したほうがいいと思うほうなんで、小さいことかもしれないんですけど、例えば先ほどから平島を2つに分けようとかではなくて、逆に栄南学区からしてみれば、日の出と十中までの距離は

どこまで違おうだろうと考えていくと、実際現実的な問題でそういうのができるかどうか
わかんないですけど、栄南学区がそのまま十四山へ行ったりとかという考えも入れたほ
うがいいんじゃないかなあと。

平島の中で2つ分けるというのは、親もそうだし、子供が、それを考えるとすごい難
しいことだと思うんで、そういう選択肢も持ったほうがいいんじゃないかなあとというこ
とで、通学の距離とか考えても同じぐらいの距離だし。

委 員 最初に出ていた小中一貫校というのも十四山でやれたらいいかなあとと思うのと、あと
自分が学生するとき、十四山村というのは教育熱心な村というイメージがすごいあって、
その当時というのは、海翔高校ができて、十四山のみんなはほとんど海翔高校へ行った
んですよね。海翔高校を進学校にするために村一丸でというような地域なんで、小中一
貫校ができるとすごくいい学校になると僕は思います。いい学校になったところに、栄
南が通わせてもらえるという形も選択肢としてはいいのかなと話を聞いていて思いまし
た。

委 員 長 今、安倍政権が教育再生会議で中一問題というのがあって、小中一貫校を推進してい
くんだという、早稲田の座長の何とかさんという人が答申をしましたがけれども、その可
能性があるかどうかということもございますし、ちょっとそのあたりは我々のレベルじ
ゃわかんないところですので、そういう提案をしていってもいいかもしれませんけれど
も、栄南全体の御意見ということではなくて、個人的な御意見ですよ。

先ほども、ちょっと事務室の控室で、栄南がこっちに行けばもう少し人数がふえる
という話をしていましたけど、そのあたりの区割りの、区長会というのは、全体の弥富の
会議はあるんですか。

委 員 あります。六役会というのが。

委 員 長 去年は、そのことがよくわからなかったんですよね。そこがどういう権限を持って
いて、どういう議論をされているかということがわからなかったんです。

委 員 区長会というのは、学区の区長代表が6人と、それから市長と事務局が集まって会合
をしていると。主に、市が催すイベントの反省会とか、そういうことが中心になって、
そのほか雑談で今問題になっているようなことを話し合うと。弥富市全体の区長が全部
集まってやる会合は、年度初めの区長の役員を決めるときだけです。それ以外は、私
の記憶ではないと思います。

委 員 長 学校区を決めるというのは、どこが所管するんですか。

教 育 長 学校区の決定については教育委員会です。

御存じのように、弥富市の現状は、行政区を主体とした学校区編成をしておりますか
ら、学校区を編成する場合、行政区を2つに割るとかそういう障害が出てきて、地域の
皆さん、そして区長さんの皆さんの了解を得ないとスムーズにいかないというハードル
があるわけです。

実際ここ最近、二、三私どもの事務局のほうにも問い合わせがございまして、先ほど
もその区長さんがやりました1号線の南側にお住まいの方が今保育園へ行っておるわ
けです。十四山の保育所へ通っておるそうです。したがって、十四山西部小学校へ行き

たいという声も届いています。そして、十四山中学校には陸上部がないということから、ことし3月までに、日の出小学校、弥中は陸上部があるものですから、姉妹そろって日の出小学校区へ引っ越しをされて、今日の出小と弥富中学校へ通っている児童もあります。いろんな問題がありまして、やはり加賀区長さんが言われまして、学区の見直し、通学区域の見直しは可能です。ただし、ハードルが高いということでございます。以上です。

委員長　ここで学区の区割りも、地図がありますように、余り硬直化しない方向でいけるといえると思うんですけども、先ほども教育長からございましたように、やはりこういうことをしたいとかという強い希望を持った人たちというのは、それができるような学校に移っていくということですけども、十四山の中学も昔から陸上部はなかったですよ。

委員　そうですね。部活動での寄せ集めで。

委員長　寄せ集めで日本一になった子もいますよね。私の子供の友達、全国小学校の100メートルで全国1位になった子もいますし、幅跳びで全国3位になった子もいますし、その当時は、キタノ先生という方がずうっと小学校で教えていて、ボランティアでおやりになっていたということだと思いますけれども、子供たちはいい指導者がいるところに行きたいんですよ。それは、私どもの今大学で、そういうスポーツ系のクラブを随分持っているんですけども、幾ら高校からいらっしゃいといっても指導者が来ないので、1番は指導者、2番は施設、そういうものだと思いますので、そのあたりをある程度解消できれば、もうちょっと十四山中学に集まるのではないかなということは思いますけどね。

そのほか何かございますか。

(挙手する者なし)

委員長　それでは、もう意見交換にたくさん入っちゃっているんですけども、御自由に御発言をいただければと思いますけど、去年の経過を踏まえてということも必要かと思えますけれども、新しいこういう意見があるという斬新な御意見もいただければということをお思います。

委員　弥富の前はあま市の市教におったんですけど、同じような適正規模をやりまして、甚目寺のほうの問題が一番あったんですけど、やっぱり学区の再編の問題と、それから学校のそれぞれの質も問題、先ほど小中一貫校とか、魅力ある学校の提案とかあったんですけど、それを両立していくというのはなかなか。学校のほうが魅力ある学校をいろいろつくって、東京みたいに、品川でしたか、学区は規制せずに好きなところに通うという。そのかわり、学校側はすごく営業的に頑張らなきゃいけないということで、その校長先生が言ってみえたんですけどね。

そういうふうにするのも手ですけど、ただそれは地域の方との問題があって、どちらに比重を置くかというのはすごく難しいなあというのはありますね。現場のほうは、魅力ある学校づくりというのをやっていかないかなあということは思います。

委員　今、ちょっと話が出ていましたが、実は私は弥生小学校に来る前、5年間は飛鳥学園の最初の校長でしたので、小中一貫は非常に経緯はわかっているんですけども、ちょ

っと余談になるかもしれませんが、たくさん全国から視察に見える一貫教育を目指しているところの半分以上は、過疎化で学校を何とか存続させたいという地域からお見えになります。いわゆる田舎型の小中一貫教育校ということですね。

奈良の天川村というところは逆転が起きていまして、小学校は1つしかないのに中学校が2つあるんですね。小学校の子供たちは全部バスで来る。だけど、うちの地域に学校を残したいということで、自転車通学が可能な中学生はそれぞれの学区の中に中学校として残っているというような地域もありますが、やっぱり自分の学校、親もそうですし、地域の方もそうなんです。弥生小学校は大変歴史があるものですから、来ていただくと、私はあのかの校長先生だったとかいう、非常に地域の中に学校が根差しているということで、自分の母校がなくなるというのは、あるいは自分の孫や子供が自分の行っておった学校がなくなってしまうというのは非常に情動的に寂しい思いがあるのかな。これが、合併してから少し時間がたてばたつほど変えていくのが難しいのかなという気がしています。

実は、私が新任で勤めたある学校も、旧永和村というところで、分裂をして、自分が住んでいる一番南側の子供は、15メートル向こうに小学校があるんです。だけど、1キロ以上向こうの学校へ通う。もっとすごかったのは、当時100メートルちょっと行けば中学校があるのに、津島市の一番南の端から一番北の端の藤波中学校まで自転車で1時間以上かけて通う。行政の境というのがあるものですから、そういうこと。でも、遠いということはあるにしても、それは合併されたときの地域の皆さんがお決めになったことで、特に大きな声ということではなくて、その後、新しい中学校ができて、多少それは解消されたわけですけど、やっぱり地域の学校に対する思いって強いなあということを感じています。

先ほど言いましたように、小・中一貫教育校をつくるにしても、基本スタンスは義務教育だということですね。義務教育というのは、まず就学しなければいけないという大前提があって、2つ目に、やはり安全に通えるという大前提があるものですから、例えば弥生小学校の学区の子が伸び伸びと過ごしたからといって栄南小学校というような、そんなことは難しいことだろうと思うものから、多少境目のところで学区の見直しをするにしても、十四山の問題ということではなくて、弥富のこれから何十年かの望ましい学区の編成ということで、みんなが傷みを分かち合うような形の一つとして、提案がないと地域の方は難しいからというような思いをしました。

飛島は学校が1つしかないんですが、どこにつくるかということでもやっぱり近い遠いが出てくるものから、地域の御理解を得るといのはなかなか大変な仕事だったなあというふうに今思っております。学校は取り組むんですけれども、やっぱり原則は歩いてきてくれる子というのが大前提になるものから、そのところを私たちもしっかり抑えていかないかなあということを今の話し合いの中で感じていました。済みません、以上です。

委員長 ありがとうございました。

やはり学校に通う子供たちの安心・安全ですよ、それは第一だということだと思

ます。

そのほか。

委員 私も十四山に住んでいるわけですが、今いろんな議論をお聞きしていて、行政区で学校が今なっているという絶対前提があって、その区割りを捨てることは難しいといういろんな話とか、それから今やっていることがやれない子を編入させるとか、そういう問題は難しいと出たんですけど、実は地域で青少年のボランティアの団体を持っています、中学生とかの子がいるんですね。その子たちに、ちょうど日の出小の問題があったころなんですけど、話を聞いてみて、もし自分の十中のほうが例えばだんだんそういうふうになっていったり何かしたときにどうするのと聞いたことがあるんです。

そうすると、新しく弥中がきれいになったから、そっちへ行きたいのと聞いたことがあるんですよ。そうしたら、「いや、別に今の学校でいいよ」と言うんです。だけど、例えばそういうふうに変わっていったとしたら、それは絶対嫌なのと言うと、そんなに子供たちはこだわってなくて、さっきのキタノ先生のお話をされたんですけど、プライベートの部分でクラブをつくって一生懸命先生が教えるリーダーがいたので、陸上のほうもすごいいい成績を出した子供たちがいたりとか、少年野球も一生懸命やっているんですけど、もっとやりたい子はリーグに入ったりとか、いろいろみんな努力をして、自分の今いるところの状況をそれなりに子供たちもわかっているんだなということがあって、親さんの問題でいいますと、さっきの平島さんの問題のとき、私も平島のほうでも話を聞くことがあって、お話を聞いたところ、全員が全員十四山が嫌だと言っているわけじゃないんですね。また、十四山西部小学校も、平島来るなど言っている人ばかりではないということがあって、結局何が言いたいかという、きちっとした皆さんに示せるものを、私たちじゃなくて行政のほうだと思うんですけど、教育委員会さんのほうだと思うんですが、こういう理由で学区編成をし直したいと。だけど、それはこれからの将来の子供たちのためにということがわかってくれば、住民の方も、もちろん区長さんたちからの後押しも必要だと思うんですね。やっぱり皆さんに協力してくれと言っただく、皆さんを集めていただいて、お話をさせていただく一番トップの方ですので、住民のほうからも理解をしていただき、いろんな団体の方にも協力をしていただいて、変えていくことは可能だと思うんです。

ただ、一番大前提は、子供たちの安全と、これからの教育という視点なものですから、それを考えたときに、ここの昨年までの委員会でも出ていたことは、やはり過小な部分にしておくのもいけない。これから、弥中とか、日の出とかが大きくなっていったら、大きくなったデメリットのほうを考えたほうがいいんじゃないかという議論をした中で、お金のことはちょっと置いておいて、それがなかったら、新しい学校をするのも一つの手かなという話で、ただ単にそれになっただけなんです。どうしてもつくろうと言ったわけじゃなくて、それも一つみんなに理解していただく方法かなという話をしたなと私は理解していて、先生方なんか、特に子供さんの気持ちとかPTAの気持ちを思って話をされていると思いますし、実際の今のPTAの方たちも、個人的ですがと言われたんですけど、みんなの気持ちかなあと思って、私もいろいろ子供たちに聞くと、

ちゃんとみんなのために考えてやってくれば理解はみんなしてくると私は思っておりますので、この委員会で一生懸命それなりに考えればいかなあと思っております。

委員長 ありがとうございます。

我々よりも、子供を集めて会議をやったほうが良いという感じですね。子供たちは、非常に柔軟な発想を恐らくすると思いますし、どちらかという大人を説得するほうが大変になると思います。

それと、中学校を弥富北と現在の弥富中学校の2校にするよりも、現在の十四山中学というものを残して3つで運営したほうが良いというのが昨年のお話でしたね。というのは、やはり2人ですと仲たがいますとよくないんで、3人いると結構子供たちって仲よくするんですよ。だから、3つというのは結構キーワードだと私自身も思っております。

中学校区は自転車で通っているんで、学校区の再編が一番いいのではないかなということですけども、人数がふえてくれば部活動もふえますし、一番大きなのは先生の数がふえますよね。先生の数がふえることによってバリエーションが出てきますので、特に中学校で音楽とか美術とか、そういうところの先生が雇えないということですね。だから、非常勤になってしまうということでもありますので、そういう教育的な困難さが出てきますので、バランスよく人数が割り振られると、この会議もそれで終わるのかと思っておりますけど、そこが難しいので、いろんな御意見をみんな聞いていると思います。

多少、もう少し体育館をきれいにしてくれとか、ここをもうちょっとやったらみんな運動する場所ができるんじゃないかとかいろいろあると思いますけれども、主は子供たちの教育という視点で、この会議は続けているわけです。

意見交換でよろしいですか。今、3の議題の意見交換に入っておりますけれども。

委員 意見交換ということで、土俵を1つにするほうが良いということで、意見交換で理解を進めていると思うんですが、ちょっとわからない部分がありますのでお聞きしますが、小さな中学校で、例えば理科の先生が足りないからといって、数学が本職なのに理科を教えるということはあるんですか。

委員 ありますね。それは子供にとってかわいそうですね。

というのは、私友人がおりまして、校長になっていたんですが、その数学の本人ですね。それは、普通の一般の教員のときに、数学だけ、今理科を教えているんだと。その人が吐く言葉は、生徒がかわいそうだと、中学校ですわね、児童がかわいそうだとということで本人が言うんですね。やっぱり専門じゃないからきっちり教えられないということかと思えます。

数学もできて、理科もできるという先生もおるかわかりませんが、1人の教員は、やっぱり中学校以上は1科目を持つと。それを高めていくというふうでやっていくのが一番よからうかと、生徒・児童の教育を受ける面からするとですね。だから、小規模の中学校というのは余り望ましくなくて、中ぐらいに規模を大きくしていくというのは、その辺からも望ましいんじゃないかと思えます。以上です。

委員長 十四山はそういうふうなんですかね。

委員 十四山は、今専門外の先生が教えてみえるということはないんですけども、むしろ

子供が少数なので、非常に行き届く教育をしていただいているものですから、あと先生方、校長先生から教頭先生まで、生徒の一面一面までの顔と保護者の方との顔が一致するような状況で教育していただいているものですから、各子供たちが通学路を通って帰っているときも、僕らも気をつけて帰れよとって声もかけられますし、そういう意味で、小規模校のメリットのほうを私は今感じています。

委員長 ありがとうございます。

昨年の会議の中でもそういう話が出ておりましたので、余り大きくなり過ぎないほうに焦点が当たっていたと思います。ですから、弥富中学がこれ以上大きくならないようにというような話で、多分クラスとして、まだ教員としての受け入れの余裕があるかと思えますけれども、という話でございました。

そのほかに何か御意見ございますか。意見交換ですので、もうざっくばらんに今お話をいただきました。

委員 また一個人の意見なんですけど、やっぱり学区と中学校と小学校とか結びつけて考えるとすごい難しいと思うんですよ。なので、名前をちょっと格好よくいって、市内留学みたいな感じで、山村留学とかあるじゃないですか、世の中で。山村に1年だけ転校じゃないけど、留学みたいな形で山のいろんな自然に触れ合って、1年たってまた帰ってくるみたいな感じで、手軽に、ちょっと来年1年栄南小学校へ行ってみようとかという感じで、そうすると、ほかの子供が1年来たりとかというのは難しいことなんですかね。転校じゃなくて、留学みたいな感じでいいですよ。

委員 それはグッドアイデアです。いいと思いますよ。余り難しく考えないで。

委員 やっている勉強というのは、カリキュラム等は一緒だとは思って、1年のスパンで考えると。

委員 むしろ、こっちの方のほうがかたわるんじゃないの。

学校教育課長 留学とか、1年とかというスパンじゃなくて、今たまたま学区外通学、区域外通学、市外から来ていただくとか、弥富の中の学区外通学というのは、ある一定の条件が当てはまる人については、そういうのを認めてはおるんですけど、全く何もなしの状態です。学区外という言い方で認められるかというのと、ちょっと難しいかとは思いますが、今転居して、住所が変わって、その学期末までとか、年度末、特に最終学年の6年生の方とか、中学3年生の方なんかは特に年度末までという格好で、学区外、区域外、あと一部、特殊な事例で、外国人の方とか、いじめや何かという部分で、そういう部分を認めておるといのはあるんです。基本的に、そこへずうっと行っていただくというか、その期間行っていただくということですので、1年だけとかというのは、今の状況の中で、海外の留学とかはまたちょっと違いますので、区域の中ですので、ちょっと今の時点で、そういうふうには当てはまらないというか、ちょっと。

教育部長 それと、考えられるのは、他の市町でも、先ほど一部言いましたけど、選択制という制度を導入しているところがございます。ただ、弥富市の場合、隣接小学校、中学校区への選択制をした場合、今問題になっているのは、十四山中学校の小規模校ですので、例えば弥富中学校、弥富北中学校から十四山中学校の選択は可能だけど、十四山中学校

からほかの学校はだめですよということはできませんよね、実際。

もし、学校選択制を導入すると、恐らく、予測ですけど、十四山中学校からほかの隣接の学校へ行きたいという子供のほうがふえるのではないかというのが事務局の考えでございます。ですから、選択制を導入したときに、十四山中学校の生徒数が減少となる問題もあるのではないかという懸念を持っております。

委員 そういえば、僕が十四山西部小学校へ通っていたときに、市江村ですから、十四山の坂中地の方に、私の親が何か預けるといふか、その住所にしたような記憶がありましたね、そういえば。そういう方法をとって、十四山西部小学校へ行っていた。何かそんな記憶がありますね、そういえばね。だから、そういう方法をとれば、そんな難しくないんじゃないかと思うんだけどね。

委員 今、栄南の副会長さんが言われたようなことで言いたいのは、教育課の方がいろいろ説明されるんですが、いろんところでいろんな意見が出て、1個ずつ打ち消されちゃうと意見が自由に言えないので、今の時点ではそうだと聞いておけばいいと思うんですね。ただ、ここの中で自由ないろんな意見の中で、ひょっとしたらいい意見が出てくるかもしれないので、自由にもうちょっと話せるといいなと。今、1つ出すとだめだなあというふうになっちゃうので。

教育部長 参考として出したものです。

委員 だめと言うんだけど、だめの中で何か出てくる可能性があるんですよ。ひょっとしたら、今の住所も一つなんです。じゃなくて、いろんな今の問題をもう少し前向きに考えるものが、今言われたことがすごく前向きに考える1つだと思うんです。なので、出していただくんですけど、もうちょっとやわらかく。

委員 前向きに検討しますと。

委員 そうそう。前向きに検討し合うような感じにしたいと思いますので、お願いします。

委員長 政治家の言う前向きに検討するというのは、検討しないということですよ。だから、積極的に、いろんな障壁があると思うんですけども、意見交換ですので、ことしの第1回目ですから、思ったことをどんどん口走っていただければいいかなということだと思いますけれども、留学ですよ。

委員 済みません。つけ加えると、おっしゃったように、少人数の小学校の魅力をそれでアピールもできるし、大きな小学校にですよ。だもんで、小さい学校だと、ここまで目が行き届いちゃうよというふうな。うちの子も1年生のところから、ずうっと5年生のところまで引きずっちゃうぐらい先生が細かく見て、ずうっと同じなもんで、留学という名前で転校生気分を味わえるというのもあるし、小学校って結局、中学校に比べて勉強云々よりも社会を勉強するところだと思うんですけども、友達関係、先生との関係、一つの社会で暮らすというのを勉強するんじゃないかと、大きい小学校と小さい小学校へ行ったことがあるという経験が経験として残るんじゃないかなあというのをちょっと思っています。ちょっとつけ加えて。

委員長 ありがとうございます。

小学校区に関しては、去年は大きな問題はないということでしたので、個人的に留学

の提案はいいと思います。現在、どこに焦点を絞っているかということ、中学校の話で、特に十四山中学をどうするかという話、そこに結論づけられるのではないかなということだと思います。

過小規模にならない程度の小規模校というのは、そういう意味では、非常に目が行き届くというメリットが大きいということはあると思います。大規模校と申しますか、大きな規模でのメリットというのものもあるし、なかなかそのあたりが、子供たちがやっぱり行きたい学校と申しますかね、そういう魅力のある学校にしていかなければいけないと思うんですけども、合併して9年、今度10年目ですか、こういうことは早くしなければいけないということで、まさしく本当に硬直化していくことですので、何とか結論が出ればいいかなあということだと思いますけれども、そこで、学区の障壁が一番大きなところでして、我々の中で去年もその壁にぶち当たっているという状況だと思うんですけども、ということですが、終わっちゃっていくんでしょうか、御意見どうぞ。

委員 学区を人数割りでたたき台を多くつくってもらって、こういうふうになっていると一度出されたらどうですかね、たたき台を。そして、こういうところで諮って、今頭の中で想像しているだけですから、この地域はこっちだ、この地域はこっちだというふうに具体的に人数というか、住民の数から見て、何か示していただいて、それで検討するという方法も一つだと思いますよ。今だと、何かそれぞれの考えている範囲が違うような気もしないでもないんですけど、私だけの考えかどうかわかりませんがね。そんなように思います。

委員長 そのことについて、教育長。

教育長 今、貴重な意見をいただきました。3中学校の地域バランス、全体で1,300人ですから、これを3校で割りますと430人、いわゆる標準規模校、学年4クラス、理想な学校ができるわけです。今、北中がそんなような形態です。弥中は大規模校ですから、6クラス、7クラス、十四山中学は2クラスということですから、今御提案いただきました事務局のほうで、3中学校の生徒のバランス、数、一度たたき台を次回までにつくらせていただきます。

委員長 先ほど、栄南の学区の小学校は、十四山に行ったらどうだという御意見はなかったでしたか。ありませんでした、ごめんなさい。

委員 昨年度、まとめたものを見てみますと、通常の適正学級数が12から18というお話なんですけれども、昨年度の記録ベースが、弥富中学が普通クラスですけど18、北中学が15、十四山が6なんですよね。先ほども教育長さんからお話があったように、単純に足してしまうと、普通学級だけで39になるんですけども、それを3で割ると13ということは、ちょうど12から18の間のベストなところに来るんですよ。

今、ふと思ったんですけども、地元の話で申しわけないんですが、前ヶ須町というのは、前ヶ須西区と東区に分かれております。けれども、子ども会は前ヶ須西、中、東という3つに分かれておる。そういうことから考えると、これを13クラスに持っていくのに、単純に弥富中学、十四山中学、弥富北中、その3つを学区をちょっと外して、

そしてその近くに住んでおられる方をベースに割ってしまうと、地図をこのところを描いて、この辺のゾーンが北中、この辺は弥富中学、この辺は十四山中学だねという、どーんとその地図をつくって、学校の地図、そんなようなこともしてはどうかという勝手な意見ですけど。

教 育 長 ありがとうございました。

事務方として、そんなような図面でたたき台をつくらせていただきます。

委 員 長 御意見もそれぞれ、きょうに関しましては皆さん意見を言っていただいたなあというふうに思います。意見交換もそろそろこれで終わりたいと思いますけれども、よろしいでしょうか。

(挙手する者なし)

委 員 長 御異議がないということで、それでは事務局のほうにバトンを預けたいと思います。

学校教育課長 それでは、次回の日程なんですけど、できれば10月22日水曜日のまた10時からをお願いしたいなというふうに考えておるんですが、今の時点で何か御都合が悪いとかというのは。

学校教育課長 そうしたら、10月29日水曜日はどうですかね。

学校教育課長 はい、午前中に。

よろしいですかね。そうしたら、10月29日水曜日、10時からということで、会場につきましては、また後日案内をさせていただきます。そのときに、一緒に、先ほど教育長が言われました資料もつけて、案内文と一緒に送りますので、一度見ていただいて、それをもってまた次回の会議にさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いたします。

それでは、これをもちまして第5回弥富市小中学校適正規模検討委員会を閉会とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。